

USHINOKO SITE

# 牛ノ兒遺跡

—平成10年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

1999年3月

茅野市教育委員会

## 序 文

牛ノ児遺跡は平成10年度県営圃場整備事業米沢地区の施工に伴い、記録保存を前提に発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものであります。

牛ノ児遺跡は採集された遺物も少量で、その内容について不明な部分が多い遺跡でしたが、今回の発掘調査によりその全貌が明らかになりました。調査の結果、少量の縄文時代中期初頭土器片と黒曜石、平安時代の土師器が発見されただけで、遺構等の確認はなされず、集落址や狩猟域等とは異なる性格の遺跡であることが判明し、その立地より扇状地形に展開する拠点的な集落などと関連を有するものと考えられ、当時の生活領域や、遺跡間の関係を解明するために重要な資料を得ることができました。今後これらの成果を基に霧ヶ峰南麓の地域史が解明されることでしょう。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者、長野県諭訪地方事務所土地改良課の皆様の深いご理解とご助力、発掘作業の皆様のご苦労により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成11年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角源美

## 例 言・凡 例

1. 本書は、平成10年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う、長野県茅野市牛ノ児遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。発掘調査等は、長野県諭訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助平成10年度国宝重要文化財等保存整備費補助金市内遺跡発掘調査並びに県費補助金平成10年度文化財保護事業補助金市内遺跡発掘調査、市費を得て、茅野市教育委員会が平成10年度に実施した。
2. 本報告に係る出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財課で収蔵保管している。
3. 遺構図面上に表されている北は座標北を示す。本報告書に掲載の土器類は1/2、小型石器1/1の縮尺とした。遺物胎土の色調については「新版標準土色帖」の表示に基づいて示した。

## 目 次

序 文	茅野市教育委員会教育長 両角源美
例 言・凡 例	
第Ⅰ章 発掘調査の概要	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第Ⅱ章 遺跡の外観	2
第1節 遺跡の位置と環境	2
第2節 周辺の歴史的環境	3
第Ⅲ章 遺跡の層序と調査区の概要	5
第1節 調査区の基本的層序	5
第2節 調査区の概要	6
第Ⅳ章 検出された遺物	8
第1節 縄文時代・平安時代の遺物	8
第Ⅴ章 調査の成果と課題	10
第1節 霧ヶ峰南麓の遺跡群立地とその性格	10

# 第Ⅰ章 発掘調査の概要

## 第1節 発掘調査に至るまでの経過

### 1. 調査に至るまでの協議

遺跡確認に至るまでの経過 本遺跡は水川耕作がなされ、また、周辺が原野のために遺跡の有無について不明であった。県営圃場整備事業米沢地区の対象地となった時点で、地域の確認を行い少量の黒蝶石剝片が採集されたことにより、遺跡の存在が明確となった。しかし、その規模や時期・性格が不明で、特に遺跡の広がりについては不明な部分が多くあった。

從来ならば遺跡範囲確認のために対象地周辺の表面採集や試掘調査により、遺跡範囲の確定や遺跡内容の確認がなされるが、耕作等の都合上試掘調査を実施することができず、調査方法を面的な調査に重点を置くのではなく、遺跡の広がりと遺物の包含状態の把握に重点を置いて調査に入ることとした。

本調査に至るまでの協議経過と諸事務 平成9年11月17日に行われた平成10年度圃場計画地内の遺跡の保護協議が長野県教育委員会文化財保護課・諏訪地方事務所土地改良課・茅野市土地改良課・茅野市教育委員会文化財課により行われ、結果記録保存の方向が決定された。この協議結果は県営圃場整備事業米沢地区着工に先立ち3,000m<sup>2</sup>以上の発掘調査を実施し、記録保存を図る。発掘調査に係る経費は、事業主体者が負担する。ただし、経費のうち農家負担分（12%）については文化財保護側が負担する。この計画は総額12,000,000円（農政部局負担10,560,000円、文化財負担1,440,000円）で事業を行い、発掘調査は茅野市教育委員会に委託するというものであった。

平成10年度の圃場関係の調査計画については、平成9年12月平成10年度文化財関係補助事業計画を提出して事業に備えた。当初計画よりも遺跡規模や内容が縮小したために年度途中に全体計画を見直し、変更申請を提出し、全体計画を総額650,000円（農政部局負担572,000円、文化財負担78,000円）で事業を行った。

保護協議結果をを受け平成10年4月14日付10課地土第5-6号、埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を諏訪地方事務所長香坂守義と取り交わした。

また、文化財補助金申請等事務・発掘諸法令事務を下記の通り行った。

#### 発掘調査による文化財補助金申請等事務経過

平成10年4月22日 10教文第1号 平成10年度文化財関係国庫事業について（通知）

平成10年6月24日 10教文第1-28号 市内遺跡発掘調査等費補助について（通知）

平成10年5月8日 10教文第11-4号 平成10年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

平成10年11月6日 10教文第67-1号 平成10年度文化財保護事業補助金申請書提出

#### 発掘諸法令事務の経過

平成10年3月19日 9教文第119-6号 牛ノ児遺跡埋蔵文化財発掘通知（57条3第1項）の提出

平成10年4月8日 10教文第2-3号 牛ノ児遺跡埋蔵文化財発掘通知（98条2第1項）の提出

#### 2. 発掘調査の方法とその経過

発掘調査の方法と経過 調査は遺跡のⅢ地形の把握と、遺物の包含層の広がりを目的に調査区を設定したが、水川造成のために旧地形や土層の遺存状態が悪く、遺構や遺物の包蔵が認められなかつたために調査は短期間で終了した。

**遺構測量** 調査区の全城測量は平板測量を基本とした。また、土層断面は水田造成等の関係よりプライマリーな土層堆積を示している地点はなく、現場においてこれらの土層について観察したに過ぎない。平面図作成作業と、レベル測量を並行して行った。なお、発掘現場における諸記録は守矢昌文、遠藤佳子、塩原博子、篠原リカ子、宮坂ひとみが携わった。

### 3. 調査日誌（抄）

5月13日 重機を用いて発掘調査に入る。遺跡範囲の確認のためにトレンチ法を用いた調査を実施する。

5月14日 トレンチ調査の継続と、土層堆積状態の観察を実施する。

5月15日 トレンチ調査の継続と、調査区全体図の作成を実施する。本日で調査を終了する。

### 4. 遺物整理・報告書の作成

**遺物の整理** 遺物整理・報告書作成は他の事業の合間を縫い、調査終了後から実施した。遺構も検出されず、出土した遺物も少量であり、器形等の不明なものが主体となる。遺物の節において記述したものはその全てが図上において器形復元したものである。また、調査の方法が重機を用いて実施したことから、遺物包含層の状況について詳細に観察することができなかった。

表面採集による遺物も含めると、縄文時代前期土器片1、黒耀石製スクレイバー1、黒耀石碎片1、剝片2、平安時代土器長胴甕片1、土器片1が検出されているに過ぎず、遺物の洗浄等の整理は短期間で終了した。注記の略号は遺跡番号の241を冠し、遺構名、地点、層位の順とした。

遺構平面図等の整理 調査区平面図は1/100の全体図を1/1,000地形図へ縮小編纂し合成し作成した。

### 5. 調査の体制

調査主体者 向角徹郎（茅野市教育委員会教育長 平成10年4月1日より5月10日）

向角源美（茅野市教育委員会教育長 平成10年7月31日より）

事務局 宮下安雄（茅野市教育委員会教育次長）

矢嶋秀一（文化財課長） 福井幸雄（文化財課文化財係長） 守矢昌文 小林深志 大谷 勝己

功刀司 小池岳史 百瀬一郎 小林健治 柳川英司 大月三千代

調査担当者 守矢昌文 発掘調査・整理作業協力者 遠藤佳子 塩原博子 篠原リカ子 宮坂ひとみ  
発掘調査期間中、遺物整理期間中、諏訪地方事務所土地收容課並びに、米沢区廻場整備委員会を始め地権者の方々にご助力頂き、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し明記したい。長野県教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係指導主事原 明芳氏より有益なご指導・ご助言を頂いた。記して感謝を申し上げたい。

## 第II章 遺跡の概観

### 第1節 遺跡の位置と環境

#### 1. 遺跡の立地と地理的環境

**遺跡の位置** 牛ノ児遺跡は長野県茅野市米沢4,607番地他に所在する。霧ヶ峰山塊は市域の北西隅に占地し、調査地のある牛ノ児遺跡はJR中央本線茅野駅から北東方向に約1kmのちょうど霧ヶ峰南麓のほぼ中央部よりやや東側にあたり、遺跡の位置する下方に米沢・一本木の集落が位置する。

**遺跡の地理的環境** 牛ノ児遺跡の位置する霧ヶ峰南麓は永明寺山・朝倉山・カシガリ山が位置し、これらの山脈からは東より藤原川・前嶋川・檜沢川・横河川等の小河川が流れ下り、山裾に扇状地を形成する。



第1図 牛ノ児遺跡位置図(1/50,000)

この霧ヶ峰南麓地域を巨視的に見ると、大きく内湾し霧ヶ峰南麓から流下する河川により浸食され、大きく3ブロックに分かれる。分断された地域内は河川による扇状地が発達し、扇状地単位で遺跡が群となる傾向が見受けられる。これらの扇状地に接する形で上川による冲積地が発達しており、扇状地と冲積地との接する部分に、東より塩沢・一本木・北大塙・鉄物師屋・埴原田の集落が展開する。霧ヶ峰南麓を流下する河川により浸食されている谷を遡ると、その源流は霧ヶ峰池のくるみにまで至り、霧ヶ峰のなだらかな丘を進むと、黒曜石の原産地である和田跡周辺となる。本遺跡から黒曜石原産地までは直線距離にして約13kmを測りその距離は約1日行程の範囲にある。

本遺跡は霧ヶ峰南麓に多い扇状地地形に立地する。この扇状地は遺跡東側に藤原川、西側に前鳴川が流下し、この両河川に挟まれた位置となる。遺跡の立地している扇状地は詳細に観察すると、遺跡東側に流れる藤原川により形成されたものと考えられ、扇状地内には小さな起伏が認められる他、氾濫等で堆積した巨岩が部分的に露出している。

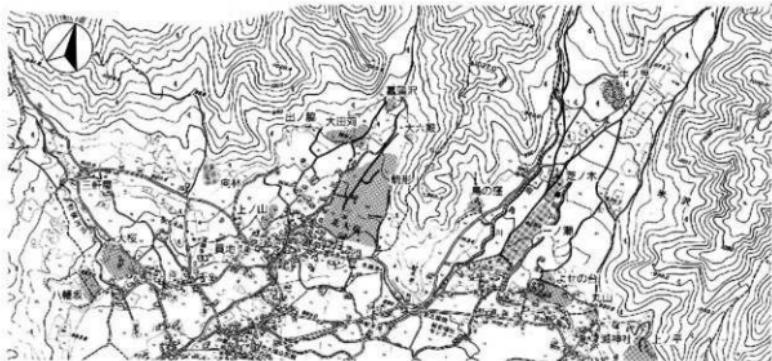
霧ヶ峰南麓は市域において湧水の豊富な地域で、市最大の水源である大清水などがある。このような湧水は霧ヶ峰南麓の伏流水が中心となるが、遺跡内に認められる湧水は脇を流れる藤原川の伏流水かと考えられ、かなりの水量が疊層周辺より湧出している。

## 第2節 周辺の歴史的環境

### I. 遺跡周辺の遺跡とその地理的位置

**周辺の遺跡の地理的位置** 霧ヶ峰南麓は霧ヶ峰山塊の支峰である朝倉山から永明寺山までの約3.6kmに亘る。この地域は大きく弧状となり、藤原川・前鳴川・檜沢川・横河川等の河川が流れ下り、これらの下部には扇状地が発達する。これらの扇状地や崖錐地等には遺跡が展開する。これらの遺跡は大きく扇状地単位に大きなグループを形成している。また、扇頂部にあたる藤原川・前鳴川・檜沢川・横河川の沢筋の一部には、黒曜石が散布する地点が認められ、黒曜石の運搬ルートに関わったと想定されている。

**藤原川・前鳴川による扇状地のグループ** 藤原川・前鳴川により形成された扇状地は割合細長い扇状地を形成している。このような細長い扇状地の扇頂部に牛ノ児遺跡、扇央部に鳥の窪遺跡・一ノ瀬遺跡・芝ノ木



第2図 周辺の遺跡とその地理的位置(1/20,000)

遺跡が立地している。これらの扇状地端部にはやや特異な孤立台地状の地形が形成され、よせの台遺跡・丸山遺跡が立地する。また、扇状地を望む山裾のテラス状の台地には上の平遺跡が占地する。藤原川・前嶋川による扇状地グループの代表的な遺跡は次のようにある。

**よせの台遺跡** 藤原川と前嶋川に挟まれた扇状地の末端に占地する孤立した台地上に位置し標高は920mを測る。<sup>(文部,1)</sup> 昭和27年に源訪考古学研究所が、昭和51年に工場建設に伴い茅野市教育委員会により発掘調査が行われ、縄文時代の集落であることが判明している。昭和51年の調査により縄文時代前期前葉堅穴住居址3、前期終末堅穴住居址1、中期後半堅穴住居址9、土坑22が検出され、遺跡の立地する台地の規模や検出された住居址等より、本遺跡は隣接する一ノ瀬遺跡の支村と性格付けがなされている。

**丸山遺跡** 上の平遺跡と同様に霧ヶ峰山塊より派生する小規模なテラス状台地に遺跡は位置し、標高は920mを測る。その内容については不明であるが、立地等より考えると本遺跡やよせの台遺跡と同様な傾向にある遺跡と考えられよう。

**瀬神社遺跡** 瀬神社は塩沢集落の産土社で、本殿は江戸時代末期に大隅流の矢崎房之助、矢崎善司により建造され、現在は茅野市有形文化財に指定されている。この神社の境内に位置する宮の下水源造設の際に水源地内より縄文時代前期前葉諸礎b式の土器片が<sup>(文部,2)</sup>得られている。同様な水源地内より縄文時代の遺物が検出されている個所は北大塙大清水にも見ることができ、霧ヶ峰南麓に展開する湧水地は縄文時代より重要な水場として利用されていたことが窺え、瀬神社内の宮の下水源は本遺跡や丸山遺跡・よせの台遺跡の重要な水場として利用されていたものと思われる。

**一ノ瀬・芝ノ木遺跡** 本遺跡や丸山遺跡・よせの台遺跡のような台地に立地する遺跡ではなく、藤原川により形成された扇状地に立地し、標高は930mを測る。遺跡の立地する扇状地は河川の侵食により南東に細長い尾根状地形となっている。遺跡は古くより知られ、米沢地区の考古学的調査を精力的に行った川実文朗氏も常に実踏されていたようである。本遺跡からは大量の黒蠅石製の石鎌等の石器が採集されており、地元にはこれらの資料が保管されている。また、石器の他にも双口土器という特異な形状をなしている土器が耕作<sup>(文部,3)</sup>中に得られている。平成8年度・9年度に県営圃場整備事業に伴い調査が実施され、旧石器時代のナイフ形石器、槍先型尖頭器、縄文時代早期押型文立野式期の堅穴住居址から後期最終末期の住居址、平安時代後期堅穴住居址、近世掘立柱建物址が検出されており、長期に亘る遺跡であることが確認されている。また、黒

黒曜石製石器、剝片が大量に得られる点などより、本遺跡は黒曜石の加工等に関わっていた換点的な集落であると考えられる。

鳥の巣遺跡 藤原川により形成された扇状地の西側に接するように伸びる、尾根状の山裾に形成された岸錐地に位置する遺跡で、黒曜石剝片や石槍、石鎌、縄文時代前期・中期土器片が得られているが、その実態については不明な部分が多い。

(文獻.5)  
藤原川線沿に黒曜石を散布する地点（藤原線A～H地区） 一ノ瀬遺跡等が展開する扇状地より、霧ヶ峰南麓の枝峰であるカシガリ山まで伸びる藤原川に沿った谷間に、黒曜石製石匙・石鎌・石錐・剝片・石皿、特殊磨石、縄文時代早期押型土器、平安時代後期土師器長胴甕・小型甕が採集されている。この沢を詰めて行くと黒曜石原産地の和川畔周辺に至るという地形的な特性等を考慮して黒曜石の搬出ルートがこの沢を通っていたものと考えられている。

霧ヶ峰南麓遺跡群の展開 霧ヶ峰南麓特に米沢地域において遺跡が、地形的な制約等から大きなグループを形成している。これらの遺跡はその位置関係や造構の時期構成から看ると、縄文時代において大きなまとまりを形成していたと考えることができる。また、先学によって多く述べられているように、黒曜石製石器加工を中心とした縄文時代の生業を推定できる地城としての重要性も踏まえて霧ヶ峰南麓の遺跡について考えなければならない。

## 2. 遺跡の研究史

(文獻.6)  
今回の発掘調査以前の考古学的調査 本遺跡は古くより周知されていた遺跡で、「諏訪火」第1巻「諏訪都先史時代遺物発見地名表」には牛兒として、土鍤・石鎌・磨石鎌が田實寅朗氏により採集されていることが記載されている。その後周辺が原野として荒れてしまったことなどもあり、昭和54年度に長野県教育委員会により実施された八ヶ岳西麓遺跡群詳細分布調査に於いては確認されではおらず、新たに平成3年度に改定された茅野市遺跡台帳により遺跡登録がなされている。しかし、遺跡内容については不明で遺物等の採集の記載はない。

# 第III章 遺跡の層序と調査区の概要

## 第1節 調査区の基本的層序

### I. 土層の基本的な堆積状況

本遺跡の立地している扇状地は、霧ヶ峰起源の火山堆積物である泥・砂・礫を基盤とし、この上部に藤原川・前嶋川の氾濫により堆積した巨石や礫を多量に含む二次堆積の砂状のロームが堆積する。これに有機物腐食物の堆積物である黒色土が堆積し台地全体を形成している。

調査区全体は水田造成により、大幅に地形が改變されており、プライマリーな土層の堆積状況を調べられる地点はごく限られた部分だけある。下記に説明を加えてある地点は調査区の最も深い部分である北側壁のものである。発掘調査において縄文時代と平安時代の遺物が検出されているが、包含層の把握や生活面の分層には至ってはいない。

I a 層 耕作土 軟質で粘性が強い。全般的に縮まりがある。現在耕作されている水田の耕土。  
II a 層 礫混入黃褐色土 埋土で、上面が硬く縮まり水田の床土となる。本層は扇状地上部の範囲を切り崩して坪土としており、基盤層に包含される安山岩系の巨石を大量に含む。

III a 層	黒色土	調査区の北側・南側範囲の一部に部分的に薄く堆積していた土層で、II a 層との整合関係が直線的にカットされたような状態で、水田造成時に上部が削平された可能性が高い。層性はやや粘性を持ち、内部に 1mm 以下のローム粒子を 1% 以下有する。
III b 層	褐色土	調査区の南側の一部に確認された土層で、層厚も 2cm ~ 3cm と薄い。やや粘性を有している。

## 2. 土層の成因と性格について

遺跡に堆積する土層を大きくその性格より I 層から III 層の 3 群に分類した。

これらを土層の状況より概観してみると I 層群は現在の水田耕作に関わる土層群で、I a 層がその状況より耕土と思われ、土層内は大型農耕機械による擾乱を受けている状況が観察される。II 層は水田造成の際に水田床土として埋められたものと思われ、埋土は基盤層を削平した土層が用いられている。III 層はプライマリーな土層であるが、本層の認められた範囲は調査区の南側一部に認められたに過ぎず、谷部には本層は堆積してはいない。谷部は基本層序と異なる堆積となり、I 層・II 層以下の堆積が押し流されたような巨石と砂礫混じりの漆黒色土が堆積している。

遺物の包含層を確認することはできなかったが、遺物の発見されている土層は I 層群・II 層群であり本米発見されそうな土層である III 層群よりは検出されてはいない。なお、水田造成により III 層群の上部がカットされていたことなどもあり、このカットされた土層内に若干の遺物が含まれていた可能性が考えられようか。

## 第 2 節 調査区の概要

### I. 調査区の現状と旧地形の復元

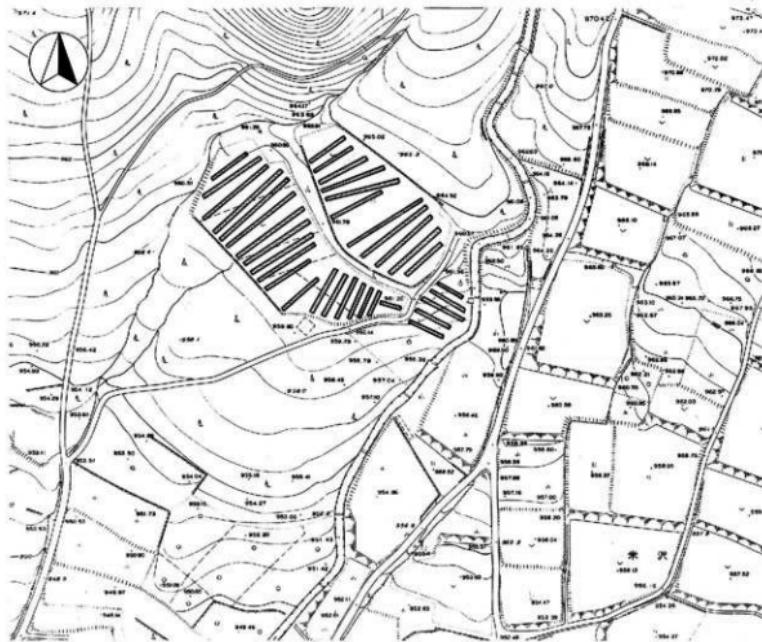
第 II 章でも記述したが、水田造成のために旧状をとどめている部分は少なく、特に調査区の範囲においては、削平部分が多く旧地形を復元することは難しい状況であった。しかし、埋め立てられた谷部の状況や基本層序のあり方、周辺の地形の状況等よりその概略を探ることができた。

本遺跡の立地する地形は基本的には、藤原川による扇状地の扇頂部である。この地形が長期に亘る藤原川の侵食や伏流水の影響により、小さな入り組み谷を形成しており、今回調査区の西範囲にこの入り組み谷の一部と入り組み谷を望む割合幅の狭い尾根の先端部を確認することができた。なお、現在でも旧地形が遺存している調査区南側には湧水が認められ、旧状を彷彿させる。

土層状態と地形の復元や遺存している旧地形の一部より考えると、本遺跡周辺は藤原川による侵食・泥流の押し出しや、伏流水の影響等により複雑な地形を呈していたと考えられ、特に藤原川による泥流の押出しが周辺や埋没谷内に見られる巨石は、藤原川の氾濫によりもたらされたものと理解でき、これらの用件から考えると、本遺跡周辺は地形的に不安定な地域であったものと考えることができよう。

しかし、水理的な観点から考えると、入り組み谷内からの湧水が容易に手に入り、なおかつこれらの入り組み谷が動物の水場と考えるならば、狩猟等には適地と言えよう。また、本遺跡が立地する位置は藤原川沿いに谷を遡る際には、要となる位置にあり、扇状地中位に位置する一ノ瀬遺跡などから藤原川を渡るのに適当な位置と考えられ、一般的な生活の条件と異なった性格を有する遺跡と立地環境から考えることができないか。

本遺跡の立地する部分は一般的な集落が立地する尾根や台地とは異なり、扇頂部に位置する氾濫原内の微



第3図 周辺の地形と調査区(1/2,000)

高地部分に營まれた遺跡と言え、地形的な制約やその環境より大規模な集落を形成する用件を備えているとは言ひがたい部分に立地している遺跡と言えよう。

地形的な観点や地形の安定度から考えて、遺跡の主体部は藤原川に沿った微高地状の尾根部が該当するものと考えられる。

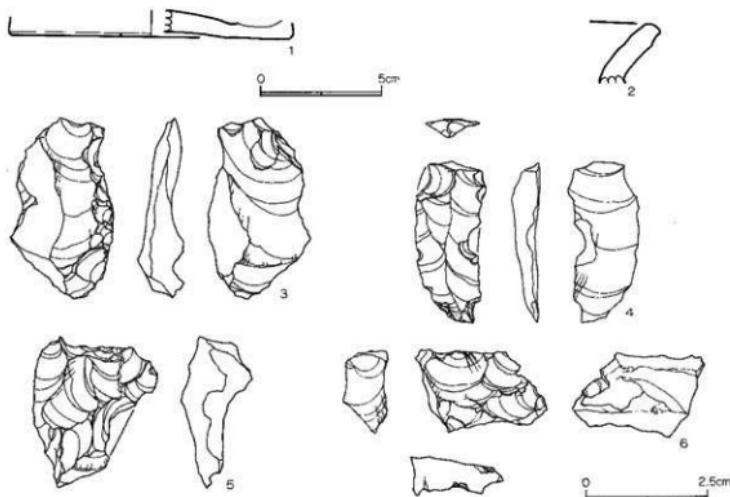
#### (註・参考文献)

- 文献.1 藤森栄一 1969「茅野市寄の台の土器」『信濃考古』28 長野県考古学会  
 文献.2 宮坂虎次・鶴岡幸雄 1978「上せの古道跡」茅野市教育委員会  
 註.1 地元研究者の五味和男氏が宮の下水槽造設の際に遺物を採集し、保管されている。  
 文献.3 武藤雄六 1965「長野県茅野市北大塙—木木発見の双口土器」『信濃』17-8 信濃史学会  
 文献.4 守矢昌文 1997-1998「茅野市一ノ瀬遺跡」『第9-10回諏訪地区遺跡調査研究発表会レジメ』  
 調査考古学研究会  
 文献.5 小松良幸・他 1973「古道—霧ヶ峰南部における先史時代の黒曜石運搬ルートと考えられる古道の調査」  
 米沢考古学クラブ  
 文献.6 烏居盛藏 1924「諏訪史」第1巻 信濃教育会撰訳部会  
 文献.7 文化庁 1979「伝承遺跡保存対策調査研究報告 3」  
 文献.8 茅野市教育委員会 1991「茅野市遺跡分布図」

## 第IV章 検出された遺物

### 第1節 繩文時代・平安時代の遺物

遺跡が小規模で、遺物包含層が水田造成により搅乱されていたことなどもあり、遺物の遺存状態が悪く出土した遺物は少ない。その内訳は表面採集によるものも含めると、繩文時代中期初頭土器片1、黒曜石製スクレイバー1、縦長剥片1、碎片2、平安時代土師器長胴壺片1、七師器片1の、繩文時代・平安時代の遺物が得られている。今回は少量の遺物だけしか検出されてはいないが、『歴史』第1巻によると、土鍬・石鎌・石鎌、弥生時代の磨製石鎌の記載があり、割合幅広い時期の遺物が採集されていたことがわかるが、今回の調査ではこれらに間わる遺物は検出されてはいない。



第4図 検出された遺物 (1・2は1/2、3~6は1/1)

#### I. 繩文時代の遺物の概要

今回の調査により得られた繩文時代の遺物は、遺跡内容が小規模なため量的には多くなく、前期末葉～中期初頭土器片1、黒曜石製スクレイバー1、縦長剥片1、碎片2だけである。遺物の出土量が少ないので一概には言いたいが、遺物全体の傾向は黒曜石の占める割合が多いと言えようか。

前期末葉～中期初頭土器（第4図1） やや張出し気味な器形を呈する底部破片で、底部中央部がやや上げ底状となる。施文は磨滅しており判然としないが、底部の器形や胎土の状態より前期末葉～中期初頭に帰属するものと思われる。胎土中には1mm以下の長石・石英・雲母細粒子を5%程度含有し、焼成は脆弱で風化が著しい。色調は橙褐色(7.5YR7/6)を呈し、部分的に水田床土の鉄分の付着が見られる。

スクレイバー（第4図3） 不純物の少ない透明感のない漆黒色の黒曜石を素材としている。素材剥片は、

自然面を残す割合厚手の主要剥離面を有する剥片を用いている。刃部は剥片の長辺に割合粗雑な調整を加えているだけである。全長3.6cm、幅2.0cmを測る。

縦長剥片（第4図4）4は不純物を含まない半透明の黒曜石を用いている。全長3.3cm、幅1.4cmを測る。本資料は主要剥離面を有し、打面部を折断する。剥片末端の一部に自然面を残す。側縁部には刃こぼれ状の細かな剥離が認められるが、剥離の状態から使用によるものとするよりも、土砂内でダメージを受けたものと考えられる。また、剥片全体に磨滅が認められ土砂等に含まれて移動した可能性が高い。

碎片（第4図5・6）5・6共に不純物を含まない透明感のない漆黒な黒曜石を用いている。厚手の板状や粒状の自然素材を用いている。両者共に素材の半端な自然面を打面とし、原材を薄くするように側縁より細な調整が加えられている。調整や碎片のあり方より剥片生産に関わりを持つものと考えるよりも、原材を薄くし石器等の素材とする製作過程で廃棄されたものと考えることができる。5は全長3.1cm、幅2.5cmを測る。6は全長1.6cm、幅2.3cmを測る。

縄文時代遺物の構成とその性格付け 縄文時代に帰属すると思われる遺物は黒曜石剥片・碎片を含めて5点と少なく、遺跡内における遺物構成を考えるには希少すぎる量である。これらの資料が同時期の遺物であるかは検証できないが、もし、同時期の遺物と捉えるならば、生活遺地とは言いたい本遺跡になぜ縄文時代の遺物が認められたのであろうか。特に墨曜石は単に剥片・碎片だけでなく、スクレイバーのような道具を含む点に興味深いものがあり、また、碎片を詳細に観察すると6のように石器素材の製作過程の廃棄品が認められる点など、数量的には少ないものの道具・道具製作過程の碎片等が認められた点を考えると、この地で簡易な石器の製作活動が行われ、土器が含まれている点などを考慮すると、土器を用いるような一定の生活が営まれていたことがわかるが、遺物（道具）組成が貧弱な点や、遺構の有無等より一般的な集落址とは性格の異なるものと考えられ、所謂遺物散分布地としての性格が窺われる。

## 2. 平安時代の遺物の概要

2点だけであるが表面採集により平安時代の遺物が採集されている。採集されている遺物は上師器長胴亞口縁部破片と、磨滅が著しい土師器体部小破片だけであり、器形を窺え知ることのできる土師器長胴亞口縁部を図示した。平安時代の遺物は数量的に見て主体を占めているとは言いたいものであり、これらの遺物がなぜ本遺跡内に入り込んだものか興味深いものがある。

土師器長胴甕（第4図2） 土師器長胴甕口縁部である。口唇の断面は方形を呈しやや内壁する。口縁部は頸部で大きく「く」字形に外反し、強い横ナデ整形が施される。体部はやや膨らみを有するものと思われる。体部と頸部際にはヘラ状工具の木口部によるオサエ状の整形が施され、若干不明瞭な縱位方向にカキメ整形が施される。なお、このカキメ整形は強い横ナデ整形により部分的に消されている。胎土中には1mm以下の長石繊粒子を2%含有し、堅緻で緻密である。色調は鈍い褐色（7.5YR5/4）を呈する。

平安時代遺物の構成とその性格付け 平安時代に帰属する遺物は上師器長胴亞口縁部片1、上師器坏体部片1だけの検出で、これらの遺物の伴う遺構の検出はなされなかった。小片資料のために時期は遺物は数量的には希少なものとの構成は一般的な集落と大差ない構成である。生活不適地と思われるような木造跡地に上師器長胴甕や上師器坏を持ちこんで生活した者の生活基盤等について興味深いものがある。なお、本遺跡より藤原川を約1m遡った河岸に位置する藤原線E地点より土師器長胴甕と焼土が検出されており、山間部の谷間に生活する平安時代の跡が認められることなどに関連を求めるに、本遺跡の有する性格の一端と関連性を持っていたことが理解できようか。また、同時期の集落が扇状地下方の「ノ瀬遺跡においても検出されており、一ノ瀬一牛ノ瀬一藤原Eと何らかのつながりを考えることができようか。

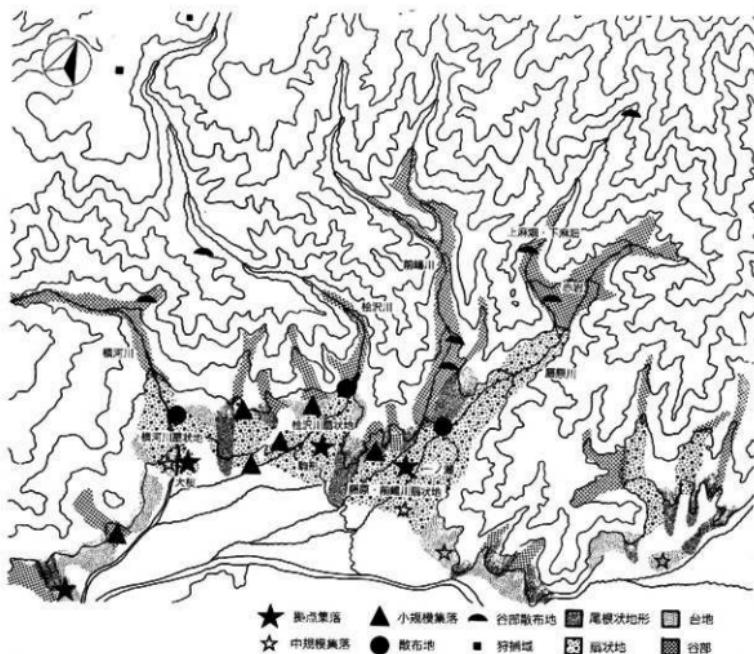
## 第V章 調査の成果と課題

### 第1節 霧ヶ峰南麓の遺跡群立地とその性格

#### 1. 霧ヶ峰南麓に展開する遺跡の立地

霧ヶ峰南麓遺跡群のあり方 第II章に記したように霧ヶ峰南麓には、河川を単位とした扇状地形が発達している。この扇状地が霧ヶ峰南麓にノッチ状に入り込み、扇状地単位に大きな遺跡群を形成している。この遺跡群を詳細に観ると、扇状地に占地する位置により、遺跡の規模や存続時期等の内容に異なりがあることが認められる。今回調査した牛ノ児遺跡はそうした中でどのような位置を占めるものであろうか。

扇頂部に展開する遺跡群 牛ノ児遺跡は扇頂部に位置している。本遺跡と同様な立地環境にある遺跡を霧ヶ峰南麓に求めると、檜沢扇状地の菖蒲沢遺跡・大六殿遺跡、横河川扇状地の三軒屋遺跡等を挙げることができる。これらの全てが調査されている訳ではないために、遺跡の内容について詳細に知り得てはいないが、(文部省)平成8年度に長野県教育委員会により実施された農業基盤整備事業に係る茅野市・原村の分布調査、茅野市米沢北大塩地区の実地踏査の結果によると、菖蒲沢遺跡や三軒屋遺跡は少量の黒曜石の散布が認められて



第5図 遺跡周辺の地形と遺跡群

る短い散布地で、本遺跡のあり方と類似している。

霧ヶ峰南麓河川沿いに展開する遺跡群 霧ヶ峰南麓を水源とする河川が流下しており、東側から藤原川、前嶋川、檜沢川、横河川が流下している。これらの河川の侵食により霧ヶ峰南麓は長く入り込む谷状地形を発達させている。これらの河川は、割合蛇行しながら長く霧ヶ峰南麓を切り込み、河川の両脇にはテラス状の平坦面を形成している。この内最も谷部に幅があり広い平坦面を持つ箇所は藤原川の上麻畑・下麻畑、西入とホーロクの分岐（赤岩周辺）、前嶋川の大平である。このような地域の内で、藤原川に沿った谷間においては藤原CからJ地点のように黒曜石剝片や石器類土器片が採集される地点が数箇所確認され、特に西入とホーロクの分岐（赤岩周辺）－藤原E・F地点からは黒曜石剝片類131点や平安時代の焼土址、この遺構に伴い土師器甕が採集されている。また、上麻畑・下麻畑－藤原G・H地点からは黒曜石剝片類67点や绳文早期押型文が採集されており、地形の割合安定していた谷間の部分については、なんらかの生活の舞台として利用されていたことが判明している。今回調査された牛ノ児遺跡はこうした谷間の地域と、広く開けた扇状地を繋ぐ重要な位置に立地していると言えよう。

## 2. 霧ヶ峰南麓に展開する遺跡の構成とその性格

霧ヶ峰南麓に展開する遺跡群の性格 谷地形沿いや谷流域に形成している扇状地に遺跡群が展開している。これらの遺跡群をその立地より分類すると、谷沿いの岸部の平坦部・扇頂部・扇尖部・扇端部・扇状地を臨む台地の地形に遺跡が展開している。遺跡の内容も散布地から拠点集落までが群をなすように展開している。遺跡立地と遺跡内容を合わせて考えると、谷沿いの平坦部・扇頂部には、遺跡の広がりの小さな散布地的な遺跡が展開し、扇尖部・扇端部・扇状地を臨む台地には拠点的な遺跡やそれに付随する遺跡が展開する傾向を看取ることができる。これらの谷間から扇頂部・扇尖部・扇端部に位置する遺跡が、扇状地単位に一つのグループを形成し、有機的に結びついていたものと想定できる。また、谷間に黒曜石の搬出ルートとして捉えるならば、今回調査した牛ノ児遺跡は、黒曜石原産地から谷間を経て扇状地に立地する拠点集落へ黒曜石を中継する重要な位置にあると言える。同様な役割を果たしていたと思われる遺跡が、その立地条件から菖蒲沢遺跡（檜沢川扇状地）、三軒屋遺跡（横河川扇状地）を挙げることができ、このように谷間と扇状地に立地している遺跡が有機的に結びつき、一つの群を構成する地域特色を霧ヶ峰南麓の遺跡群は持っている。

今回調査された牛ノ児遺跡は立地等より中離地的な性格や、河川の渡岸地点の可能性が考えられ、また、平安時代においては、同時代の遺物が採集されている藤原F地点との関連等を考慮すると、藤原川の谷間を通過する交通路の想定や、平安時代の集落が発見されている一ノ瀬遺跡のような集落址などを含めてその関連を考えると、牛ノ児遺跡や藤原F地点などは、生活の痕跡が希薄な点等を考慮すると、山深い霧ヶ峰南麓を背景とした山櫻みの仮設的な生活の場とも捉えることができ、興味深い問題を多く含んでいる遺跡と言えよう。

## (註・参考文献)

文献.9 長野県教育委員会 1997 「人規模開発事業地内遺跡－遺跡詳細分布調査報告書一」

註.2 山間部の名跡については、地元の歴史に詳しい吉田 実氏の御教示を得た。

註.3 藤原川を遡上しホウロク鉾を経て大門峠に至る道筋があったことは、江戸時代の絵図にも見られ、また、本遺跡下方に位置する一ノ瀬遺跡の脇に江戸時代末期の道筋を兼ねた馬頭觀音の石仏や、藤原川の瀬橋等にも同期の馬頭觀音石仏が点在することなどを考え合わせると、藤原川を遡上する轍が近世までは交通路であったことが検証できる。

註.4 平成9年度に調査された一ノ瀬遺跡の平安時代の豊丘住居址第41号住居址において、ドングリが壁際に貯蔵されたような状態で同まって検出されており、平安時代においてもこの地域では堅果類の採集が行われ、山の果が食生活の一端を担っていたことが窺え、これらの供給と山櫻みについて関連性を求めることもできようか。また、藤原川の中流に上麻畑・下麻畑の名称が残されていることも興味深い点である。

写真図版



1. 滝跡風景



2. 調査区全景（北側から）



3. 調査区全景（北側から）



4. 調査区全景（北側から）



5. 調査風景



6. 測量風景

## 報告書抄録

ふりがな	うしのこいせき						
書名	牛ノ児遺跡						
副書名	平成10年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	守矢昌文						
編集機関	茅野市教育委員会						
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 TEL 0266-72-2101						
発行年月日	西暦1999年3月日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
牛ノ児	長野県茅野市 米沢 牛ノ児	20214	241 2分 30秒	36度 12分 4秒	138度 19980513～ 19980515	1,082	県営圃場 米沢地区 に伴う時 前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
牛ノ児	散布地	縄文	なし	中期初頭土器片 スクレイバー・剥片 碎片	縄文時代の散布地		
	散布地	平安	なし	土師壺坏・長颈甕	平安時代の散布地		

---

## 牛ノ児遺跡

—平成10年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

---

平成11年3月20日 印刷

平成11年3月24日 発行

編集 茅野市教育委員会

発行 茅野市教育委員会

長野県茅野市塚原2丁目6番地1号 (0266)72-2101(代)

印刷 有限会社 森仙印刷所

長野県茅野市本町西3-1 (0266)72-2259

---